

2017.04



Vol. 03
FREE

Alfo Matsuki

写真 第一章

鏡がきらいだ。

朝、顔を洗うときも、トイレに行って手を洗うときも、私は手もとばかりを見ている。正面の鏡は見れない。自分の顔を見たくないからね。

嫌いなんだ、自分の顔が。

だからもちろん、写真なんか嫌いだった。だって、目が半開きになるかも知れないし、鼻の穴が丸見えかも知れないし、ちがうな。いや、それもあるけど本当は、太って見えたら嫌だし、顔がデカく見えたら嫌だし、目が小さく写るのも嫌だ。

おかしい話だ。写真はその通りにしか写さないのでね！結局は、自分の身体的なコンプレックスを、写真によって「はい、あなたの本当の姿はこうですよ」と、提示されるのが怖いのだ。

だから、嫌いだったんだ！写真を撮られることも、撮られるのを嫌う自分も。

自分のことを客観視できないという事実をつきつけられるんだから。本当はこうなりたいのに、そうでない自分を受け入れられない。こんなの自分じゃない！と悲鳴を上げて、逃げる。

あるほは、私の写真を撮りたいと言った。私は後ろ姿ならいいよ、と言った。

あるほの撮る私の後ろ姿は、今まで撮った自撮り（自撮りは、さあ、撮るぞ！と覚悟を決めて自分の納得のいく表情をキメて撮っていた）や、この写真の自分はいいな、と思っていた正面の写真なんかより、ずっと素敵だった。そしてなにより、自分らしい気がしたんだ。

遠くからなら、撮ってもいいよ。

ちっちゃな私の姿は、景色の一部になり、でもちっちゃいなりに存在感を発していた。ちっちゃくても、「わたし」とわかった。そして、そんな自分の姿を、だんだん受け入れられるようになってきた。



この写真は、 誰の為のモノなのか

山形に來た十年前、ただただ美しい風景の前に、写真を撮りたくなっていった。そして、自分が住むということによって関わりをもった背景を知ったとき、見えてくる景色は変わったのだ。過去に思いをはせたり、これからのことを思ったりする写真は僕が伝えたいこと「そのもの」のような気がしていた。

そう、伝えたいこと。

美しいと感じて撮った僕の写真は、僕をはなれて、だれかに見せたい写真となっていた。



漠然と五十歳になったら、人を撮り始めようと考えていた。そんなときに、なっちゃんと出会ったのだ。彼女は魅力的で、記録写真と称しつつ、その内面を描きたいと思ったのだ。

自分の顔はみたくないと言う。

「顔なんて、その人の一部分にすぎないよ」と、思った。

後ろ姿をみればみるほど、その人らしさを感じるようになった。「外見を撮ること」自体が目的じゃないんだと、思えて嬉しくもなった。

でも、

この写真は、誰の為のモノなのか



写真 第2章

そのときは、自分を客観視できるようになってきたのかな、と勘違いしていた。

あるほなら、もしかして、どんな風に撮ってもかっこよくなるんじゃないか？

そんな幻想を抱いていたのかもしれない。

ねえ、写真撮ってよ！

あるほは、鳩が豆鉄砲食らったような顔をしてから、嬉しそうに笑った。

紅葉がきれいな河原というロケーション。写真を撮ってもらいながら、きっと素敵な写真が撮れてるんだろうと思ってワクワクしていた。その写真、何かのプロフィール写真にしようかな！なんて考えたりして。

そう、プロフィール写真だ！ある芸術

家の女の子が「あるほさんに撮っていたできました」といって、とっても素敵な写真をプロフィール写真にしたの。話を聞くと、彼女も写真を撮られるのが大嫌いなんだそうで、それなのに頑張って自分にシャッターを切らせたのだ、と。

そうか：頑張って、かあ。なんだか、彼女が羨ましかったんだな。

撮影が終わって自宅に戻ると、すぐにあるほから写真が届いた。「なかなかいいの撮れたよ！」というメッセージ付きで。

「え？」私は写真を見て、ぼーぜんとした。そこに写っている自分は、自分が思う自分の姿とはまるで違っていた。コンプレックスの塊だった。なに、このぶっさいく!!

がっかりして力が抜けると同時に、怒りまで沸いてきた。自分は何を期待していたのか、ばっかじゃないの！そうだ、

おかしい話だ。写真はその通りにしか写さないのにね！結局は、自分の身体的なコンプレックスを、写真に



あるほの撮る私の後ろ姿は、今まで撮った自撮り（自撮りは、さあ、見直して決める）と

あるほに撮ってもらったからって、自分が素敵に変身するわけじゃないのにね！自分に対する怒りは、理不尽にもあるほにまで向けられた。「なにこれ！全然良くないじゃん！」もう2度と撮って欲しくない!!」

あるほもさすがにこれには怒った。そりゃそうです。私が、悪い。

すさまじい風が吹いてきた。ぼくは、風からにげるしかなかったんだ。
ぼくは、走った。前から、ここちよい風を感じるだろう。
いつか、きっと。



自画像

写真なんて、もう、いいや。自分の顔がそんなに嫌いなのか。どこが？どんなふうに嫌いなのか？

私は思い立って自画像を描き始めた。

じーっと鏡を見つめ、クレヨンで、ごしごしと。何枚も描いた。そのたびに、違う自分の顔。表情。

人の顔っておもしろいな。もつともつと描きたくなって、身近な人の顔も描いてみた。家族とか、友達とか。

ある日、「私のことも描いて」と、友達に言われ、私は喜んで描いた。彼女の優しいふんわりした表情が描けて、私は大満足で彼女に見せた。

その反応は、期待していたものとは違った。私はビックリした。気に入ってくれると、喜んでくれると思っていたから。それと同じような出来事がその後3度続いて、ずいぶんショックで落ち込んだっけなあ…。

でも、気付いたんだ。彼女の反応は、私があるほど「写真を撮って」と頼んで撮ってもらった写真を見たときと、同じ

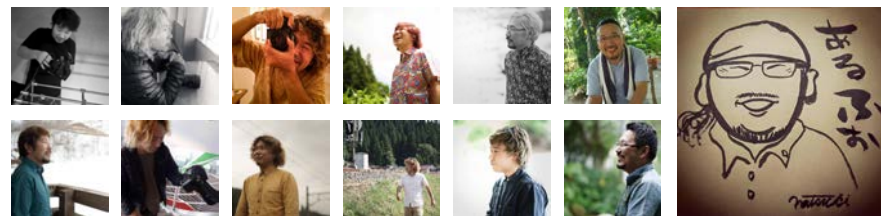
じゃないか、って。みんな、自分はこうでありたい、という姿があるんだ。だから、そうじゃない自分を見るのは嬉しくない。自分に置き換えれば、すぐにわかることだった。

でも、自分が見ている、感じている「その人」の姿は、その人の思っている「自分」とかけはなれているなんて考えたこともなかったんだ。

私は覚悟を決めた。

自分がどう見えたいと思っていろいろ見えている「自分」は、その人に見えている自分ではないんだ。見てみようじゃないの、その自分を！

「あるほ、いつでも写真撮っていいよ」
(上から目線か！)



あるほ

あるほのことは、もうずいぶんたくさん
の写真も撮ったし、絵もたくさん描い
た。

おもしろいんだ。

あるほは、自分の容姿について全く、
本当に全く、興味が無い。

だから、太ろうが痩せようが、ずっと
同じ服を着てようが、ヒゲが伸びようが
髪が伸びようが、かまわないんだって。

どんな風に人から見られても、いい。
いや、どうでもいいんだから、そんなこ
と考えたことすらなかったんだな。

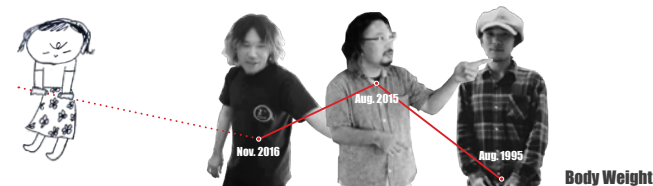
あるほとの出会いは、Facebookだっ
たわけだけれど、そのプロフィール写真は帽子
で顔も見えないモノクロのものだった。

実際に会ったら、丸っとした体格と、
人の良さそうな優しい顔があった。

その後、昔はとっても痩せていたこと
が判明する。どうしたらこんなに太るま
で、自分が太ってきていることに気がつ
かなかったのか、私には不思議でならな
かったけど、「見た目」に全く興味がな
いんだから、当然だね！

初めての2人展であるほの作品を初め
て見た。とっても繊細で美しい。こんな
作品を作っているということ、あるほ
自身が結びつかず、もったいない気がし
たんだ。少し、痩せてみたらいいんじや
ないかな、健康にもいいし！

それから、あるほのことを撮るようにな
った。それは、私に見えているあるほ
るほ、ということになるんだけど。優



しさだったり、鋭さだったり、繊細さだ
ったり、ユーモアだったり。

カメラを持つようになって、撮る方の
感覚というか、気持ちもわかるようにな
ったのは大きい。

どんなときにシャッターを押すのか、
どんな写真を選んでいるか、ということ。
どう見えているのか、見える。

あるほを描いた絵も、そのとおり。見
て描いているんだけど、見えているよ
うに描くだけなんだ。あるほは変わって
いなくても、見方が変われば、絵も変わ
る。



この冊子を作るに際し、たくさんのなつちゃんの写真を見返した。山ほど。それぞれの写真を撮ったときに頭に描いたことが思い出されておもしろかった。

おもしろい？

いや、おもしろいことの方が、少なかったはずである。自分が撮りたいなっちゃん、そのまま受け入れられることはまれで、正解のない緊張感。平行線を辿る問答。写真をみせても、「これいいの？」と他人事のような返答。

後ろ姿や小さい姿を撮ることから始め平行線の問答も繰り返したが、撮るときは常にとともにいた。それを積み重ねた。

ありのままを撮るために、感じる感覚への妨げは徹底的に排除した。機材のスムーズさはもちろん、ポケットに入っているモノを出すことまで。すでに風景を撮影して経験を積んでいたんだ。撮るための何かするのではなく、ただそこにいたのだ。そして、シャッターが押された。

いまや、ありのままを楽しんでいるのだ。そう、うつった写真もありのまま。



写真 第3章 なつき編

この冊子を作るのに、たくさんの写真を見た。自分が映ってる写真を山ほど。見たことのない写真がたくさんあって、おもしろかった。

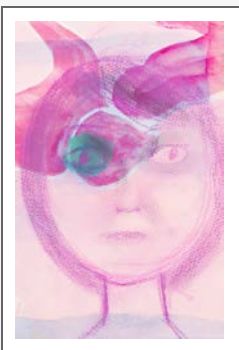
おもしろい？

過去の私ならそんなこと、おもわないだろうな。いや、それ以前に、見れないだろう自分の写真なんてまともに。てゆーか、そんなにたくさん自分の写真があることじたい、信じられないことじゃないの！

後ろ姿を撮ることからはじまり、小さい姿やポーズきめてる写真を経て、どんな姿も撮られるのが当たり前になった。

大きなカメラは威圧感あるからと、小さなコンデジで撮ったり、日常を記録するように撮ったり。記念でもない、モデル撮影でもない、そこに映る私は私そのもので、空気をすって、まばたきをして、歩いたり座ったり、時に飛んだり、とにかく生きている私だった。「前に大喧嘩した、あの、あたしが気に入らなかった写真、見せてよ」

封印した写真を見てみたくなった。





人を撮るということ

伝えたいことを伝える手段のひとつとして、僕の場合は「写真」があるように思う。「写真」という一つの概念が共通言語として働き、僕の感じたことを伝えやすいと思ったのであろう。山形に来るまでは、全く興味のなかった風景も住むことによって、身近になり、撮りたいと思わせた。一方、人を撮りたいという思いは、昔からあった。それは内面が表情にあらわれるだけでなく、相反してさえも、その人のことを感じることができることに興味を持っていたのだと思う。視覚的に表面が写る「写真」、そのこと自体にはまったく興味がなく、むしろ、そこから読み解ける、あるいは、感じられる何かが、興味深かったし、なぜ、感じることができるのか、探し求めているのだ。風景を撮りたい衝動に理由はなかつ

た。遡って理由をもっともらしく探してみることは出来たかもしれないけれど、ただ、撮りたかったの一言で済んでしまう。しかし、人を撮るということには、理由を探していた。だから、理由がみつからず、50歳になったら、人を撮ろう思ったのも今ならうなずける話なのだ。

さとうなつ子を撮るということ

計画をたてるということは、僕には何も意味を持たない。ただ、こういうこともあるであろうという可能性をあきらかにするだけの行為である。さとうなつきと出会って二人展のDMをつくりながら、僕の将来像を語る場面があった。（お互いを知るよりも先に二人展の開催が決まってしまったからというだけでなく、あまりにもお互いの価値観が違いすぎたことも手伝って、お互いのことを知りたいたいと思うようになっていった。）当然、

50歳になったら、人を撮りたいということも語ったが、そのときに素朴な疑問が返された。「なぜ50歳からなのか？」と。それには思わず笑ってしまった。「そだね！」そんな感じで、前倒しで人を撮ってみようと思ったのだ。人を撮りはじめるといふことにも、理由はいらなかったのだ。撮る人もいないから、さとうなつきを撮ってみるかな。そのときは、そう思っていた。

理由はいらないのか

僕（ら）は感動したことを言葉にして伝える。しかし、実際にその場にいれば一番よく、それを言葉にしただけのモノは、伝えている側からは努力はしても補えない部分はあるし、その言葉の受取方がそれぞれによって異なることを排除することは難しい。そういった点では言葉にして考えるよりも直感はとても重要

だ。人を撮るということは、まさに、そのようなことだと思ったのだ。だったら、僕は、みたままを、ありのままを、伝えようじゃないか！言葉で説明するまでもなく、楽しんでいたり、仕事していたり、様々な感情をかかえるときもある。いずれの状況でも、言葉に縛られずに撮りたいと思うようになっていった。「鏡を見ることが嫌い」ということからはじめて、「撮られた写真は誰のためのものなのか」など、さまざまな、壁にぶつかりながらも、今では僕らの間に写真があることは、日常になっていったのである。同じシーンを視覚的に撮ることは可能かも知れないけれど、写真が特別なモノでなくなった瞬間に、それは、さとうなつきを撮るということすらを超えた、ぼくらの生き方であり、表現したいこと伝えたいことが知らず知らず書き込むモノになっている気がしている。

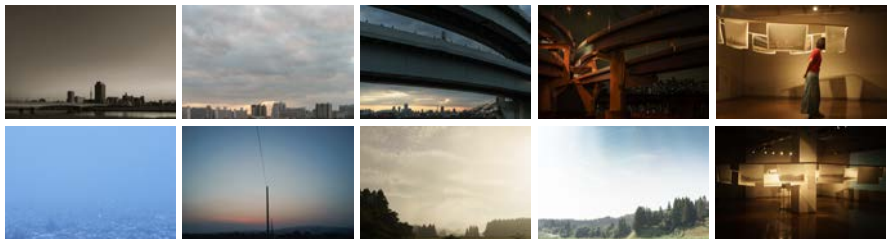
撮った写真をみてみよう。2015年8月、はじめて撮った写真。2015年10月、気に入ってくれた写真。その後は、「なにこれ！全然良くないじゃん！」「もう2度と撮って欲しくない!!」（本人談、ということで、絵本制作を撮った2016年2月まで撮らない期間あり。）これらの写真をみて理由を探したこともあった。今夏出版予定の絵本を描いている写真、これは、記録としての意味合いを間違いなく持った。遡って撮ることはできないのである。そういう観点から言えばどの1枚も、撮ることはできない大事な記録として、一瞬を記録した価値あるモノに違いない。

それが、理由だろうか？

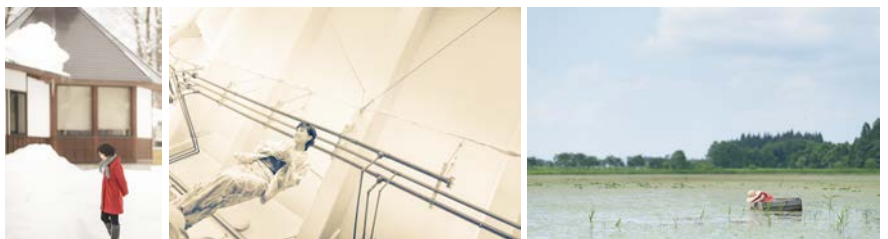
こたえは、もっと簡単に撮りたいから撮ったのだ。だから、きっとこれからも、撮り続けたいのだ。



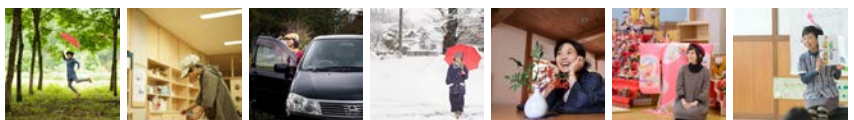
2016年 / 漆喰紙, コットン紙, 伊勢斐紙風雅 / pigment print
あるほなつき展 / Jun. 3-12, 2016 / 蔵ギャラリー-enta



2016年 / 伊勢斐紙風雅 / pigment print / まち
前田有歩作品展 / Aug. 23 - Sep. 4, 2016 / 山形市悠創館



↑ 2016年 / 漆喰紙, コットン紙, 伊勢斐紙風雅 / pigment print
あるほなつき展 / Sep. 2-10, 2016 / 山形市まなび館

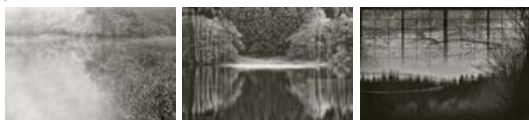


↑ 2015年～ / photo
Profile撮影



↑ 2016年 / 伊勢斐紙風雅 / pigment print / きおくのあrika
前田有歩作品展 / Dec. 21 -28, 2016 / 悠創館ギャラリー

↓ 2014年 / 伊勢斐紙風雅 / pigment print / Aer > Aether
Les Rencontres d'Arles photo folio review 2014
Jul. 7 - 10, 2014



← 2016年 / 伊勢斐紙風雅 / pigment print / Emerging
Visions of Japan /
Samurai Foto Group
Exhibition / Feb. 20 -26,
2016 / 横浜サブウェイギャ
ラリーM

WORKS



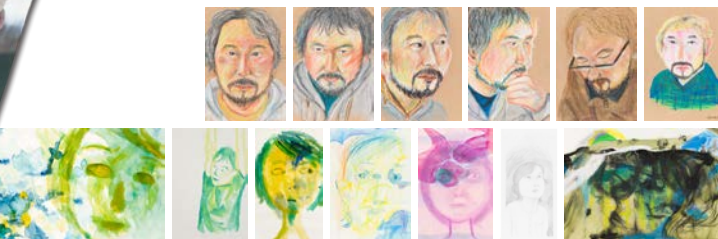
↑ Apr. 25, 2016
この写真、本当は、大喧嘩
の4か月後なんだな。
同じ河原に、撮り直しに行
きました。



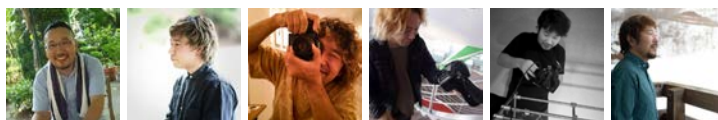
2016年 / ペン, アクリル
あるほなつき展 / Jun. 3-12, 2016 / 蔵ギャラリー-enta



2016年 / クラフト紙 / クレヨン
さとうなつき人物画展 / Aug. 15 -21, 2016 / 蔵ギャラリー-enta



2016年 / クラフト紙, 他 / クレヨン, 鉛筆, アクリル
あるほなつき展 / Sep. 2-10, 2016 / 山形市まなび館



↑ 2015年～ / photo
Profile撮影



← 2016 年～ / さとうなつきの似顔絵ケーキ
お菓子の平和堂コラボレーション
www.facebook.com/okashino.heiwado/



← 2005 年～手づくり絵本
第6回逗子市手作り絵本
コンクール 『おてんき
おじさん』 角野栄子賞受
賞 他受賞多数



← 2015 年 山形県ふるさと CM 大賞
真室川町出品作品原画

インフォメーション

インフォメーション4つ2まんがが さいじ
時代とともに...



www.facebook.com/alfonatsuki/

twitter.com/alfo_natsuki



おいたちエピソード②
幼稚園のころ
さとうなつき
絵本作家
山形県最上郡在住
1976年3月3日
クラスのイラストが描い



山形県山形市在住
1974年6月3日
幼ない頃の記憶はあんまりないけれど、上野動物園での出来事は今もはっきりと覚えている。こうやって、カメラの使い方を教えてもらって、写真を撮った。丁寧な丁寧にとった気がするんだ。モ

てある黄色いTシャツをいつも着ていたしゆん君に初恋。密かに想いを寄せるだけで告白せずにおわる。母の好みで、いつも男の子のような格好をさせられていた。ピンク色やフリフリの女の子らしい服は一度も着たことがなかった。私もそれが、気に入ってたけどね！
前田有歩(またあるほ)

山形県山形市在住
1974年6月3日
幼ない頃の記憶はあんまりないけれど、上野動物園での出来事は今もはっきりと覚えている。こうやって、カメラの使い方を教えてもらって、写真を撮った。丁寧な丁寧にとった気がするんだ。モ

「あるはなつき展」観にきました。という、気分です。撮影しました。カメラに慣れていない僕は反対向きで、なつちゃんは、自然な感じ。おや？僕も自然な感じで写ってる！
編集後記
「前に大喧嘩した、あの、あたしが気に入らなかつた写真、見せてよ」封印した写真を見てみたくなった。
「あー！さがつてみよう！2015年の12月2日だつて！」

「なーんだ、なんでこれがそんなに嫌だつての？どこからどうみても私で、ふつう」の写真。でも、すごくいい！とは思わない。
あたしに：ふつうだね笑
なぜかなー。
それは、私が急に思い立って「撮って！」と催促したから、スマホで撮影したものでした。
あーそうそう、嬉しかったな！
「スマホがよくないわけじゃなくて、あるほの心意気。いつもみたいにカメラを構えて撮ってはいなかつたんだね。
あーむ、いや、むしろ、意気込んだんだね。力が入りすぎたつて言うか？無理矢理、撮らせちゃったんだね。
あ意識しちゃったよね。大事に撮ろうって思いは一見、大切だけど、言葉で縛るような、ありのままを見逃しやすかつたのかもね！
な改めて見ておもつたのは、あれからあるほはす

ごい努力を重ねてきたんだな、ということ。日常だってなんだつて、いっただつて真剣に撮っているんだ。それは、写真を見れば、伝わってくる。
あいろいろ学んだことも多いけど、一番は、お互いのカメラを構えたときのぎこちなさが、なくなつたことかも。カメラがあることが、当たり前前日常になったんだね。それに伴って、たくさんのかを考へてきたね。いまは、楽しいばかり！でも、写真は、その場にないと、撮れないんだよね！
発行日
2017年4月1日発行
編集人
前田有歩・さとうなつき
発行所
あるほなつき
あるほなつき
〒990-1233
山形県山形市
飯田2-12-27
電話(前田有歩)
08011337769
次号(5月下旬予定)